

## 鳥

精華中学校 1年 河島 勇人

ある日のことでした。鳥が好きな私はぶらりぶらりと、いつもの散歩道を歩いておりました。何となく、あてもなく、空を仰ぎながら。

すると、ふいに青い夏の空を赤いものが飛んでいったものと見ました。確かに赤色でした。

ただ、何か——例えば、風船の類たぐいや今は、飛行機のようなものかもしれません。見間違いかもかもしれません。だから、この日は、やっぱり空を見上げて帰って行くのでありました。

しかし、あくる日、またこの公園の前を通ると、赤いものが飛んでいきました。飛んでいったほうをふり返ると、きれいに公園の中に隠れていたのです。私は、走って走ってただひたすらに、公園に着きました。

古い公園なので、草が茂る、木が茂るといふふうでした。草いきれがむんむんと伝わってきます。丈の長いイネのようなのを分けて進みます。葉ずれの音しかありません。

そんな、山深いところにあるような公園の木々の間に光るものがあります。私は、雑草どもを踏みつけて、足音をたてて近づきます。

すると、そこには小さな池がほつんとありました。長年放置されていたのでしょうか。藻ででしょうか、水草でしょうか。ささなみにゆれています。ここは、大きな緑陰です。小さな虫けらがぶおんぶおんとよろめくように飛び廻ります。私は、震えながら光の少ない池を一周しました。古いわりに、水は澄んでおり、夏だというのにひんやりとしていました。

ちなみに鳥の鳴き声は聞こえません。ただ葉のこすれる音ばかり。

赤い鳥の声は、幾度と聞きました。空耳ですが。

赤い鳥の姿も、幾度と見ました。幻影ですが。

これらは、よく耳をすますと聞こえなくなり、近づくと聞こえてしまうのです。悲しくなりました。

私はあきらめかけて後ろを見ました。帰りましょう。足を弱々しく地面に置いて帰ろうと

します。けれども、池を見つめ直します。やっぱり、また歩きだします。トボトボ、トボトボ  
私は帰りました。

やつのことで茂りの中からでてくると、一本道の遠くには、私の家の瓦が見えています。こ  
れが私が来た道です。

そのことに気がつくと不意に、私は笑いました。笑います。笑いは大きくなっていくのです。  
上を向いて白い歯を見せながら。

空はいよいよ夕焼けて、さつきの公園には、こうもりが飛びだし、もう美しい夕方です。来た  
道のマンホールもかがやいて家へと帰ることをうながしているようでした。私の家が夕焼けよ  
り少しいすい明かりをつけました。もう一度私は、小さく笑ってかけだしました。

どうやら私は、鳥がなかなか好きなようです。